

---

# 甘い約束を

馬路キレ子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

甘い約束を

### 【Zコード】

Z0751E

### 【作者名】

馬路キレ子

### 【あらすじ】

携帯もパソコンも無い、ノスタルジーに満ち溢れる田舎町。都会で心に深い傷を負い、人間嫌いになつた少年が引っ越してくる。そして、一人の女の子と会つ。自分とは、まったく正反対の、もう一つの平行線。

人の送る人生には、大まかに分けて二通りのタイプがある。

一つは、自分とは違う他人と接するのを好み、日向に出て太陽のように明るく生きる者。

もう一つは、自分とは違う他人と接するのを嫌い、日陰に潜み影のように暗く生きる者。

偏見に満ちた人間の割り振り方だが、実際の程度はどうあれ、大まかに分けた二つのタイプは、それぞれ違った人生の歩み方がある。趣味や主張、遊びの楽しみ方一つとってもそうだが、例えば好き嫌いの行動が明確に現れる恋愛に関して言えば、それに順ずる行動にしろ思考にしろ、この二つのタイプは、実に相対するものであるという事をクッキリと現す。それは、絶対に交わることのない平行線のようなものではないだろうか。

だが、そんな相対するべき二人が、もし離れられないほどの関係に陥つたらどうなるか。

ふと、誰かが施したカラクリから、定められた二つの運命の線は緩やかな弧を描き始め、意識と常識の世界を越えて、絶対に交わらないはずの平行線を奇妙に交わらせる。

「静うかにい！おまえらあ、静うかにいしろ！」

横開きの扉をわざと音の出るようにけたたましく鳴らし、訛り混じりの教師の怒声が響くと、室内を元気一杯に遊びまわっていた少

年少女が笑顔と足を止める。

僕は連れられるよつて、教師の後ろにヒタヒタとついていくと、教壇までゆつくりと歩いていく教師は、バタバタと慌しく自分の席に戻る子ども達をチラチラ見ながら出席簿を上下させて、続けて言つた。

「おまえりあーもおう朝礼の時間さ終わつとるぞー一席につかんかあ！」

ひどく訛つた教師の言葉は、どこか都會育ちの僕には滑稽に思えた。

両親の都合で僕が越してきたのは一ヶ月前だったが、ベタベタとまわりつづけめうな田舎の空気は、正直言つて僕の肌にあわなかつた。

ここに来るまでの道のりもそつだ。

駐在警官が一人しかいない交番のついた寂れた駅で数十分待ち、2時間に一本しか出ないバスに乗り、無人の野菜直売所が目印のバス亭を降りて、道路補整が満足に行き届かない塗みの酷いあぜ道を一直線に進むと、大道の横に小川が流れているのが見える。すっかり土と砂に塗れた新品の革靴を進ませ、小川に架けられた石造りの橋を渡ると、辺りのビニールハウス畑から放出される独特の土臭さを鼻に感じながら、日差しで少しぬるくなつた風の先に木造の建物がぽつんと建つ。風になびく針葉樹を日印に進むと、そこは目的地。僕の通う予定の小学校だった。

「今日から転入す（し）てきた新入生いを、皆さんに紹介するぞお。  
それえ、皆あに自ひ紹介してみろお」

酷い訛り教師が、鞄を持つた僕の背中をポンと押す。

子ども達が一斉に僕を見る。同じ年くらいの少年少女から、ジリジ

りと照り付けた太陽にも似た視線を当てられて、小学三年生にもなつた僕は『上がつて』しまつた。ただでさえ他人が余り好きではないのに、顔も知らない大勢の前で喋れと言われては、赤面に赤面を重ね、まごまごと口で「お……あ……あ……」と音にならない小さな声をあげることしか出来なかつた。

僕は恥ずかしくて死にそうだつた。

「皆あ今からお前の仲間だつつのこ、す(し)かたねえなあ都会つ子は。おらが変わりに言つてやる。この子の名前は直也。近藤直也君おやだあ。都会の小学校から來た子だがあ、皆あ仲良くしてくれよお」

都會都會と、まるで差別するような教師の声が憎かつた。視線を送る誰も彼も、自己紹介も出来ない僕の声に、まるで見世物小屋の珍獣を見るような笑いを含んだ表情だつた。僕は、今すぐにでもここから逃げ出しあつた。

「次にい席だがあ。誰えか隣となりい空うついとるところないかあね

酷い訛りの教師が教室を見回す。

すると子どもたちのせせら笑いが聞こえてきそうな教室の前の席から、一人の子が手をあげる。

「先生え！おらの隣が良いと思ひますう！」

窓側の席から聞こえる元気一杯な声。

三つ編みに結わいた黒髪から小麦色の肌が眩しい少女の姿。窓から吹き込む、土臭さのない爽やかな風を受けて立つ少女の姿に一瞬、僕は心を奪られた。グンと手を真つ直ぐに伸ばし、太陽の欠片が零

れ落ちるようなハニカミ顔で、キラキラと光が差し込む黒い瞳は、恥ずかしさに暮れる僕の目に深く焼きついた。

「おお、学級う委員長すじょくの富沢の隣いかあ。そりやあいい。近藤は眼鏡をかけるくらい視力も悪いからあ。前の席のほうがいいじゃろ。町沢の隣いの佐藤は、隣の山田の席へ行つてくれえ。じゃあ富沢あ。近藤のことあ、ようすべく頼むぞお」

教師に言われるがまま、僕は富沢と呼ばれた少女の隣の席に吸い込まれるように座つた。

「おら、学級委員長の富沢。みやざわあけみ富沢朱美。近藤君とか言つたね？何か困つたことあつたら、おらに言ひてくれ。これから仲良くしてくんう」

「…」

眩しい笑顔で迎えられて、僕は動転する脳内にある恥ずかしさの余り、彼女のそれに対して「はい」とも「いいえ」とも答えられなかつた。

しばらくして授業が始まった。

都會の進学塾に通つていた僕にとって、授業の内容は簡単だつた。はつきり言つて僕は勉強が出来るほうだ。学校が使つている教材に書いてある殆どの項目は、すでに一年前にやつたことで、やる気など無かつた。授業中にざわめく同級生や、訛りの酷い教師の教え方と相まって、僕は授業を受ける気が無かつた。

「なあなあ近藤！都會つてどんなどこよお

「近藤ん家の都会の畠と、おらんちの畠とどっちがでかい？」

「おら聞いたことがあるぞ！毎日、レストランンツーとこいつてパスタつてのを食うらしこぞー！」

「なんねパスタつて。洋食家のケン坊のお父ちゃん家で食つカレーライスと違うんか？」

「馬鹿やどお！カレーライスなんて田舎の食いもんじゃー・都会はーライスと違うんか？」

皆パスタじや

「ところどパスタつて何？」「

「し、知らん！」

「なんね、お前知らんのに言つとつたんか」「

「知らんけど美味しいもんじやー・しかも、たぶん高い！」「

「どれくらいじや」

「うーん。そうじやなあ。婆っちゃんの作る豆が一度の出荷で一万円ぐらいじやから…」

「ふむふむ、おらんどこも、それくれえだ」「

「三千円ぐらいじやーな？ そつじやろ近藤ー」

「くえ三千円ー？ そりやすげえなー！」「

休み時間は、都會から來たといつことで質問攻めだった。

その質問の質の良し悪しよりも、近寄つてくる山猿のような同級生たちに、僕は苛立ちを覚えざるをえなかつた。僕は、厚かましい他人との接触が、なにより嫌いだつた。図々しく自分の領域に入つてくるような人間の、その無神経さが嫌いだつた。

僕は、都會の小学校で酷いイジメにあつてから、ずっと交友関係という物を持たなかつた。

小学校に上がつてすぐの頃、僕は両親から「友達を多く作れ」と言われて、余り得意でない口を精一杯震わせて、拙いながらも交友関係を築こうと思つた。興味の無い趣味を理解しようとした、勉強が出来ない子が居れば助けた、誰もが嫌がる面倒は進んでやつた。

だが、ふと気付けば僕は、いつの間にかクラスの中で人差し指を指される存在になっていた。

どんな事をやっても嫌がられ、クラス中からケタケタと笑われる、一人ぼっちになっていた。交友関係を築こうと必死になつた努力の結果、僕は助けようとした誰からも裏切られた。踏みにじられた。先生を含める皆、表では口当たりの良い言葉を吐くが、裏では他人のために必死になる僕を、せせら笑っていたのだ。僕は、この時から嘘をつくのも、つかれるのも嫌いになつた。

それから僕の孤独な生き方が始まつた。  
決して、人間関係に傷つくのが怖いわけじゃない。僕は元々、独りで居る事が好きだった。

そういう意味ではむしろ、孤独になつてからのほうが、僕の心は清々としたくらいだ。嘘をつく他人と関わつて、自分の心に偽りをもつて生きずにはすむ。生きているということに嘘をつきたくないなかつた。僕は幼かつたが、孤独をこよなく愛するようになつた。

「なあなあ近藤！ 聞いておるんか？」  
「この服、都会のかあ？ 高かつたんじやろー！」

だから、こういう類の連中が嫌いなのだ。孤独の時間を害す連中。映画の西部劇でよくある、幌馬車を囲むインディアンのような同級生の言葉攻めを無視し、僕は不貞寝を決め込んだ。

「なんね都會の子はすぐ寝てしまうんか？ 根性がなかねー」  
「こらーー！ 皆あ！ 近藤君が困つとるでしちうが！」  
「いかんうるさいのが来たあー！ 学級委員長の富沢じや。みな散れ散れっ！」

「近藤君に悪さすつと、おらが許さんよー！」

さつきから何処かへ行っていた学級委員長、宮沢朱美の声がすると、群れていたインディアンたちは蜘蛛の子を散らすよつて教室の端に消えていった。

「おらが先生からプリントもらつてくる間に、あいつら油断も隙

もねえだ。」めんねえ近藤君

「…

「おらが近藤君を任されたんだ、守つてあげるからね」

「…う

「そんたら赤くなつてどうしただ？熱でもあるのけ近藤君？」

「…ひむといつ！熱なんかない！馴れ馴れしくするな！僕から離れろ！」

僕は女の子に守られて恥ずかしいと思つた気持ちが前に出て、宮沢に対して酷く突き放した言い方をして机に突つ伏すと不貞寝を続けた。守つてもらつて、初めて放つた言葉が『離れる』なんて、普通の子なら怒るにしう何にしう突つかつてきそうなものだが、宮沢はフフッと笑うだけで、何も言い返してこなかつた。

その内に次の授業が始まつた。

日が少し傾き始めた午後2時ごろ。

一日の授業が終わると、クラスの男女子は一齊に教室を飛び出して、古びた校舎を駆け抜け野遊びや川遊びに出かけていった。

「ふう…」

僕は休み時間の度に顔を突き合せなければならぬ同級生達から解放されるとと思うと、少し気が楽になった。一人、鞄を持って教室を出ようとした時、後ろから声がする。

「待つてー待つてよう近藤君ー！」

知り合つたばかりだといひのこ、耳慣れもすむこの声の持ち主。  
宮沢だ。

聞かなかつた事にしようつ。空耳とこいつとこじようつ。僕は、そそくわと黙つて教室を出ようとしました。

「待つてつて言つてるでしょが！聞こえんとな近藤君！？」「えつー！」

教室を出ようとした瞬間、体が止まつた。

それもそのはず。宮沢は赤いランドセルを片手に持つと、ダッと驚くべき速さで僕に近づき、進行方向に振る僕の腕をガツシと掴んで離さなかつたのだ。

「近藤君、捕まえた！なあ、休み時間はずつと教室にいたでしょ？校舎も見れなかつたと思うし、今からおいらと見にこようよ。ね、ね？」

「や、やめろよー僕は帰りたいんだ！」

「そんだらこといつて後で迷つても知らんからね。おらは、こいら辺詳しいだ。ぐるっと紹介がてらー一緒に帰るべ」「ちよ、ちよ、ちよー！」

引っ張られるように半ば強引に宮沢に連れられて、僕は学校の校舎の隅々を見学した。

おそらく彼女は、学級委員長を務めるほどだから面倒見の良い姉御

肌なのだろうが、今の僕にとつては苦痛以外の何ものでもなかつた。何度も振り払おうとしたが、流石田舎に揉まれて育つた富沢の腕力は強く、都会の非力な僕の体では反抗することも適わなかつた。

僕は諦めて、富沢のペースに乗ることにした。

その中で幸運だったことは、僕を強引に連れてゆく富沢が同じ帰り道で、同じ門限だったことだらう。さつきも言ったように、こういふ田舎ではバスが2時間に一回しか来ない時がザラにある。帰る時期を逃せば、同時に電車も使えず帰れない。つまり帰りに乗るバスや、電車の時刻が同じであれば、家に帰れないといったことは無いのである。

僕に、元気一杯で話しかける富沢の穢れを知らない屈託の無い笑みは、帰り道を歩く間中ずっと続けられた。

「ここのは、もう20年もたつるらしいよ。でも木の世界の中じゃ、おら達くらこらじこよ、木って凄いねえ」

「…」

丘地の学校から続いた針葉樹を過ぎ、

「この川は、夏になると良つく魚が釣れるだよ。父ちゃんが前に一杯ヤマメとつてきて、あん時は嬉しかつただあ！今度、近藤君もやつてみよ？」

「…」

小川に架けられた橋を渡り、

「あれは悟郎さんの家のトマト畑。あつちはマー坊のお父さんがやつとる二ンジン畠！」

「…」

ビールハウスの見えるあぜ道を通り、

「なあなあ。都會も良いけど田舎もどうね。近藤君は嫌いそうだけど、おらは田舎も好きだけどなあ。ちよつと止まって息すつてみ?スウーッと、ハーッと!土の匂いがして、気持ちいいベー…」

「…」

すっかり夕方になった頃、同じバスに乗つて、

「いやーこつから見える夕焼けはやっぱ綺麗ね。おらはこの駅から見える夕焼けが一番好きだなあ。近藤君はどうね?都會にこんな夕日の見えるとこある?」

「…」

駅までの同じ帰り道。

「うめんねえ今日は。なんかおら、都會の子と話すと思つと舞上がりつちまつて。近藤君が疲れとるよつても知らないで、おらばかり話してしまつただ。明日は、もつとお喋りしよね近藤君。絶対よーーじゃあまた明日ねーー!」

「…」

すっかり暮れなずんだ向かいのホームから手を振つて、富沢は二両編成の上りの電車に乗つた。帰り道が同じだと思っていた僕は、チラチラと笑顔を振りまく彼女を見ながら下りの電車に乗つた。そう、同じ帰り道を行く彼女と僕の家は、ちよつと反対方向だった。

帰り道、ただ連れて行かれるだけで、何も言えなかつた僕は、や

つと富沢から解放されてため息をついた。客がまばらしかいない電車の中で、このようなことが明日も続くのかと思うと、僕は気が重かつた。

だが僕は、次の日も、またその次の日も、天真爛漫な彼女のペースにすっかり乗せられてしまっていた。次第に慣れていく僕の孤独を愛する心は、いつしか彼女との接触によつて緩和されていった。

ただ引っ張られて、不自由を強いられる富沢との毎日は、孤独を愛する僕の生活の一部となつた。常に田障りで、邪魔な存在だった。小学校も何年か立つと、次第に都会の子だからといって質問してくれる好奇心のみなぎるイングティアン達は、僕のまわりから居なくなつていた。そして、皆まるで教室に居る僕の事を空気のように感じ始めた。

僕にとってそれは、願つてもない状態だつた。

誰からも見られず、誰からも聞かれず、誰からも知られず、誰からも見えず。自分には誰も構わない、どこか無機質にビルの立ち並ぶ都會にも似た、その孤独の空気が非常に好きだつた。

「近藤君ーー今度隣町にボーリング場が出来るだよー！ね？行ってみよ！」

だが、孤独な静寂は一声に破られる。

大きな声で寄ってきて、僕の机をバンと叩く富沢は、クラスで空気でありたいと思う僕に、こんな孤独を愛する僕に付きまとつてきたのだ。

富沢は根が明るく包容力があり、皆を纏め上げるような統率力もある。いわゆるクラスの人気者の素質を持つ日向のような女の子だつた。孤独と静寂を愛す口陰のような僕は、何度も彼女に「嫌だ」「もうやめてくれ」とせがんだ。だが、日向の富沢はあつ氣らかんとした態度で笑つて、次の口も同じように僕に付きまとつた。

うんざりだつた。富沢の声が聞こえるたびに、僕の心は消沈した。富沢が、いくら面倒見のいい子だからといって、僕にとつてそれは、お節介以外の何物でもなかつた。

だが、富沢の押しの強さは強烈で、僕は強く反抗できなかつた。反抗したいと思つても、いつの間にか彼女の力強い雰囲気に流され、従うしかなかつた。

そんなこんなで小学校を卒業して、近くの中学校に上がつた頃。僕は放課後。いつものように校舎の一階の踊り場で、喧騒に近い思春期の少年少女らの声を避けるため、嘶きが終わつて帰るまでの孤独な放課後を満喫していた。

「…さあい！」

踊り場についた窓の下から微かに声が聞こえる。

男の声だ。声変わり間もない男の声は、何かを訴えかけるように必死に震えていた。僕は、孤独の時間を邪魔された悔しさもあり、好奇心に誘われて窓を開けて、その声の先を見た。

「…沢あつ！俺えは本氣いなんだ！付き合つてえくれえ！」

僕は、窓の外から男の姿を見た。

整髪料を塗りたくり、何もわからずにシンシンとあらゆる方向に逆

立った髪の毛、大人ぶるような少し大きめの丸いサングラスをかけ、無意味に首や手に銀色の装飾品をぶら下げた学生服姿の男。背の高さからして、上級生のようだ。

「へへ…」

僕は、思わず笑いを堪えた。

田舎者が都會者を真似て、背伸びをするような姿は、都會者の僕からすれば実に滑稽だった。裾を延ばした学生服姿で頭を下げた男の先を見ると、そこには女の子が立っていた。

「安達先輩。あだち本当にごめんなさい。おら、先輩のその気持ちには応えられねえです」

耳にタコが出来るほど、聞きなれた声。

そこに立っていたのは、富沢朱美だった。安達と呼ばれた学生服の男は、告白を断られたことに落胆したが、すぐに富沢に食い下がる。

「なしてだ！なして富沢は、俺の気持ちには応えらんねんだ！」

「おら。別に先輩が嫌いじゃないんですけども…」

「富沢！俺は自惚れるわけじゃねえが、格好は良い方だ！」

「安達先輩は格好いいですよ。おらのクラスでも評判になるぐらいだ」

「じゃあ何でだ！俺ん家は田舎とはいえ金持ちだ！山もある！大きな烟もある！富沢と遊ぶ金だったら不自由はさせねえ！指輪だって何だつて買ってやる！俺は今の彼女とも別れたんだあ！富沢と付き合つたためになあ！」

「せ、先輩！あんなに仲良かつたじゃないですか！なにしてつだよー」

「俺は、そのぐらいの覚悟をもって富沢に告白したんだ！頼む

う！付き合つてくれ！」

「そんなこといつても、おらは駄目だ。絶対に。絶対に、駄目なんですぅ」

「何が駄目ね！理由を聞かせてくんろ！」「

校庭裏の土煙を上げながら一步、また一步と安達が迫る。言葉数を増やす安達に、宮沢は持っていた教科書を遮るように前に突き出して、安達に向けて深くお辞儀をすると、小さく呟いた。

「おら…今、好きな人がいるだ

いつもは快活な笑顔を浮かべて笑う宮沢の声が一変する。言葉の意味を理解し、ショックを受けてヘナヘナとその場にへたり込む安達を尻目に、遮った教科書をスッと戻して、顔を上げた宮沢の頬は薄桃色に染められていた。

「だから、おらは駄目なんだあ！本当にごめんなさあい。でも、わかってくれ下さい先輩」

「うわあああん！」

頬を染めて、田を逸らし、どこか恥ずかしげで真実味のある宮沢の表情に、安達は隠しきれないショックを伴つて、涙を浮かべて、その場から逃げ出した。

「安達先輩、傷つけてしまったかなあ。おらにも好きな人くれえは居ると思つてくれるといいんだが…」

踊り場の窓から一部始終を見ていた僕は、宮沢の放つ「好きな人」という部分に、なんとなく不思議な気持ちを覚えた。彼女の友人でも恋人でもない僕が、なぜか「好きな人」という言葉に揺れる。窓

から見下ろしたセーラー服姿の富沢を見ながら、僕は自分の心を納得させようと物思いに耽つた。

良く考えれば僕にとつては最上の出来事じゃないか。  
いつも付きまとつてくる富沢が、自分以外の誰かの相手をするとい  
うならば、僕にも自由の時間が増えるじゃないか。孤独の生活に戻  
れる、好転のチャンスじゃないか。

「好きな人」という言葉に揺れた心だつて、一時の戸惑いさ。  
夏に木々にへばりつきながら五月蠅く鳴くセミたちと同じこと。  
夏の終わりに聞こえなくなつて、静けさに感傷的になつて寂しくな  
るのと同じだ。

秋が訪れれば誰もが忘れてしまつよ。

「好きな人がいる」。別におかしな事じゃない。

彼女の立場になつて考えてみれば、中学を上がつた女子が、誰かに  
恋愛感情を覚えるなんて普通のことだ。恋愛感においては男性より  
も発達していると言われる年頃の女の子が、恋の一つもするのは当  
たり前のことなんだ。

「あつ！そこに居るのは誰ね！」

窓枠で物思いに耽る僕を富沢が指差す。

しまつた！と僕は思わず窓下に身を隠した。別に隠れる必要は無い  
と後で思つたが、知らないとはいえ覗いてしまつたという罪悪感か  
ら、僕は踊り場に潜んだ。

ガンガンガンガンツ！

階段が強く叩かれるような音、僕の居る踊り場目掛けて誰かが上つ

てくる。

奴だ… 富沢だつ… 富沢が来る… !

上履きを削るような、この音からして、おそらく今の富沢は全速力！  
上るであろう階段は、全て三段抜かしが必定だ… ッ！

僕が長らくしてきた体験と計算によつてはじき出された富沢の速  
力は、およそ立ち漕ぎの自転車並時速30km！アスリート顔負け  
の運動神経を持つ彼女なら、転ぶ事も考えずに全速力で階段の三段  
抜かし位のことはやつてのけるはず… ! 校舎の裏手から回ったと  
して、だとしても、この踊り場到達時間までは15秒もかからない  
… ッ！

「…！」

僕は冴えて冴える頭での思考を一旦止め、とつさに上階段から逃  
げようとした。

だが、すでに下階段には富沢の姿が見えていた。

「誰ね！おらの話しを盗み聞きしてたのはー！」

僕は踊り場の上階段に三歩目の足をつけたくらいで、富沢に学生  
服の襟を捕まっていた。

そのまま下の踊り場に引きずられて、投げられるよつに壁に押し付  
けられると、呼吸の荒い富沢に怯むように僕は腕と足を竦ませて、  
思わず顔を隠した。

「…んのおー人の話を盗み聞きするなんて悪い奴だあー！」

グイッと伸びる富沢の手。

僕の顔を覆っていた腕を掴み、力一杯に富沢が取り払うと、僕の目に肩で呼吸する富沢の姿が見えた。僕は思わず言った。

「『ごめん！ 聞く気は無かつたんだ！ 許してくれ富沢！』

「え？ …こ、近藤君？ おらの話、盗み聞きしてたのは近藤君だつたのけ！？」

僕の腕を掴む富沢の手が力をなくしたように垂れる。

どうしてだ？ と僕は思ったが、富沢は顔を真っ赤にして僕に言った。

「…」、近藤君！ まさか、お、おらの…おらの声聞こえたか？ 話、聞こえたか？ 聞こえなかつたよなあ？ なあ近藤君！ おら、聞いてるだよ！」

顔を真っ赤にして、どもり氣味に話す富沢。僕に口止めをしているつもりだろうか。

そうか。おそらく彼女の言つていた「好きな人」とやらが身近に居て、その人に「好きだ」という情報が伝わるのを恐れているのか。

「な、なあ！ おらの言葉わかるけ？ 聞こえなかつたよな近藤君！？」

同じ質問を繰り返す富沢。ここまで来ると、なんとも愛らしくて、どうか、愚かといふか。

そこまで頑なに気持ちを抑えて守り抜くといつのも、おかしな話だ。いや、逆に考えれば、「好きな人」に対し、それほど真剣だと言うことか。僕は、そんなことを考えながら、心の中でまた『何か』が揺れる感じがした。

「聞こえなかつた」と、言つるのは簡単だ。

彼女に嘘をつけばいい。優しい嘘だ。そのほうが彼女も、余計な心配をせずに安心するだろう。だが、ここで僕は、苛立ちにも似た、とある感情が沸いた。

それは今まで、孤独の時間を妨害され、良い様にやりくるめられていた富沢への反抗心だ。

ドンッ！

「あやつー！」近藤君、なにすっだよー！」

僕は、自分の内なる悪魔の囁きに身を任せて決心すると、赤面している目の前の富沢を、ためらいなく自分の手で突き飛ばした。そして、初めての攻勢に気負い負けしまいと、背を正し、田の前に倒れた富沢を見下ろすように、少し嗜虐的に語り始めた。

「偶然だったけど、聞こえてたよ。富沢さん。一部始終、全部ね」「！」

「意外だったよ。富沢さんに好きな人がいるなんて。いつも僕の邪魔をしている富沢さんに好きな人がね。へえー本当に意外だ」「…す、好きな人が居るくらい。ふ、普通のことですねーか！」

「そうだよね。普通だよね。で、富沢さんの好きな人は誰なんかい？上級生？年下？年上？もしかして大人？僕の知っている人？あの安達先輩をフツたんだから、随分良い人なんだろうね」

「…近藤君」

「僕は元々、そんなに口は軽いほうじゃないんだが。君には付きまとわれた恨みがある。その気になれば、この事、誰にでも言ってしまうかもしれないよ、富沢さん」

「たしかに付きまとったのは、おらだけど…恨むだなんて…おらは近藤君が…そ、その…心配で…」

「他人の親切、大きなお節介！勘違いしないでくれよ！僕は君に邪魔されて、うんざりしてるんだ！僕は都会からここに来て数年！嗅ぎたくない土の匂いを嗅がされて！見たくもない田舎の夕焼けを見せられて！聞きたくもない富沢さんの声を聞かされたんだぞ！」

「そんなん…おらは、おらは…田舎の良い所、近藤君にみせたくて…ヒック…ひどいよお、近藤君」

悪魔の尻馬に乗った僕の口は、いつも十倍は饒舌なものだつた。強く放たれる僕の嗜虐的な言葉に、倒れた富沢の目には薄らと涙が浮かんでいた。だが僕は、その弱々しく倒れる兎のような彼女を見て、再び悪魔に心を委ねた。

「富沢さんには、好きな人がいるんだろ！僕に付きまとわなくても、その好きな人に付きまとえばいいじゃないか！そうだ、その方がいい！僕だつて孤独に生きることが出来るしね！」

「…そんな！」

「富沢さんに好きな人が出来たように、僕だつていつまでも子どもじやない。いつかは好きな人も出来るんだ。その時に富沢さんが居たら迷惑なんだよ！わかるだろ！もう君には居て欲しくないんだよ！」

「…近藤君…そんだらこと言わないでける。おら…誰に嫌われても良いけど、近藤君に嫌われるのは悲しいだあ…」

「へえ、そう。僕は嬉しいけどな。君に嫌われるなら、僕は何でもするよ」

「…おらのこと許して…許してよ…ふええ～ん」

「泣いたつてダメさ。僕はもう君の秘密を握つてしまつた。そのことだけは変わりようのない事実なんだから。それに泣くようなことじやないだろ？好きな人が出来たくらいのこと。バレてもなんの弊害もないじやないか」

いつの間にか、僕は心の扉が開いたよつて、冷徹で残酷な悪魔の傀儡になっていた。

富沢は、紅潮した顔からあふれ出る涙を腕で拭いながら、泣き出した。

いつも強気な彼女が泣き出した。彼女の前ではやられっぱなしでしたた僕が、富沢を泣かせた！それを見て僕の嗜虐心は膨らみに膨らみ、ついにその思考は、悪魔の傀儡から悪魔そのものに成り果てた。

「そうだ、富沢さん。泣いているところ悪いけど聞きたかったことが一つあるんだ。聞いてもいい？これに答えてくれれば、安達先輩に告白されたことも、好きな人の事も黙つておいてあげるよ。僕にしてきたことも許してあげる」

「…えつ、こ、近藤君。許してくれるの？」

「うん。ただし嘘はつかないでくれよ。僕は嘘をつかれるのが大嫌いなんだ」

「…おら嘘なんてつかねえ！近藤君、言つてける。！」、答えるべく

！」

僕は、富沢に悪魔の言葉を投げかけた。

「ねえ、富沢さんの好きな人って誰？」

田の前で泣いていた富沢が僕の言葉を聞くと、その紅潮した顔は肌色が隠れるほどさらに赤くなつていった。

「…お、おら言えねえだ！そんだら恥ずかしいこと言えねえだ！」

「やれやれ、物分りが悪いね富沢さんも。君には『言えない』なんて決定権なんてないんだよ」

「…嫌だ！言いたくねえ！おらは、おらは…言いたくねえ！」

「あーあ。そういうの本当にズルいよね。孤独が好きな僕をあれ

だけ傷つけて、不自由にしたのに。おかしいじゃないか。自分だけ自由でさ！そんなにその人の事が好きなのかい！」

「好きだ！好きだから…言えねえだ！」

僕は、富沢の拒否する態度を見ながら苛立ちが最高潮になるのを感じた。

ここまで頑なに富沢が守る男とは、どんな奴だ。日向のよつに快活で、あんなに笑顔の似合つ富沢。クラスの誰もが僕の存在に気付かず嘲け笑つても、たとえ見捨てる事のなかつた富沢。僕の富沢を…

！？

いつの間にか、僕はただの他人であつたはずの富沢に執着していれる自分の心に気付いた。

おかしい、別にこんな事を言つつもりなんて無かつた。ただ明るく振舞う富沢を見返したかった。

それだけのはずだった…

「言えよー言えるだろー言つんだ！僕が富沢さんを本当に嫌いにならないうちに言つんだ！」

ああ、意味不明な修飾語なんてつけて、何を考えているんだ僕は。僕の中にせつかく芽生えた悪魔が消えていくじゃないか。言いたいのはこんな事じゃない。素直に富沢に向かつて「嫌いだ！」と傷つく言葉を放てばいい。簡単じゃないか。ふとした拍子、一度の追い風、そんな、ちょっと誰かに背中を押してもらうだけで、言えそうな小さな言葉だといつのて、なんでここまで躊躇するんだ。

僕が思考の中で葛藤を繰り返す間に、赤面していた富沢の口が開いた。

「す、好きな人言うだ。だ、だから。お、おらのこと嫌いにならないでけろ。」

勝った！

悪魔に掌握された僕の言葉が、彼女の秘密を漏らさせた！全身をまとうように噴出している汗が、勝利の余韻を歓迎する。心の鼓動が、声になつて僕の体をすり抜けていく。

さあ言え富沢！誰が好きなんだ！

さあ言え富沢！君は誰のものなんだ！

歪んだ独占欲に塗りつぶされていく僕の心の声。

だが、次の瞬間、富沢が放つた言葉は、僕の心の意表をつく意外なものだった。

「お、おら、近藤君が好きだあ……」

悪魔の囁きに灑んだ僕の心に、涼やかな風が過ぎ去つていった。

「…えつ？どういづ？」

「おらが好きなのは近藤君なんだ！」

「それって……」

「でも近藤君は、おらの事嫌いなんでしょう。『ごめんな』おら、田舎もん。馬鹿だから。自分のことばっかで、無神経だったから。いつまでも近藤君を傷つけていたなんて知らなかつたからあ

つ

「ま、待つてよー。富沢さん！！」

動搖する僕の言葉など聞かず、富沢は泣きながら校舎を出て行った。

その日、僕は田舎に来て初めて独りで帰った。

喜ぶべき孤独が訪れているのにも関わらず、僕は嬉しくなかつた。蝉が泣き止むような物だと思っていた僕の心は、なぜか寂しかつた。

僕は、家に帰ると帰宅の遅い両親が作ってくれた夕飯もそのままに、自室のベッドに倒れた。眠ろう。一晩眠ればすぐに、普段の僕に戻る。孤独を愛する僕に戻るさ。わかっているさ。人を傷つけて得た罪悪感も、好きだと言われた不思議な気持ちも、一時的なもの。人間にとつては一瞬の気まぐれなのだと。

ふつくらとした羊毛布団に包まれながら、僕は眠ろうと瞼をとじた。

だが、寝ようという意識に反して僕の頭は冴え、思考を止めることが出来ないまま、静寂に包まれた夜の時間が過ぎていく。

眠れない。

富沢の涙が、僕の心に焼きついている。

僕自身驚いている。

あれほど孤独でありたいと思って、小さな心を肥大化させて、悪魔にも成り果せた僕が、こんなに優柔不斷な男とは思わなかつた。宮沢が涙を流して逃げ出した瞬間から、僕は罪悪感に苛まれ、葛藤の連續だつた。

「富沢にあやまろう」 「素直にあやまるべきだ」と、頭の中で考えれば考へるほど、

「当然の結果だろ」 「お前は悪い事をしていない」と、心の中の悪魔が否定する。

いつしか他人だと思っていた富沢が、僕の中で特別な人になつていたのか？

彼女を独り占めしたいという独占欲？いいや、違う。そんなんじゃない。

第一、僕は彼女の何者でもない。

友達でもなければ、恋人でもない。ただの他人。ただの他人なんだ。

それに、天真爛漫で笑顔の似合う彼女を悲しませた僕が、独占したいなんて感情を抱くのが、そもそもおかしいだろ。そうだ。僕は孤独が好きなんだ。自分の心に嘘をついてまで友人を作ろうとした日々を思い出せ。きっと富沢も裏では、僕をあざ笑つているはずさ。好きだつて言つた事だつて嘘だ。きっと僕への当てつけ。本当の好きな人…その事を隠すための嘘なんだ。だから僕は、たとえ悪魔になつたとしても、孤独のためなら誰かが傷ついても構わない。そう。

僕は、誰かのために生きることは辞めたんだ。

カーテンの隙間から漏れる朝の光。  
白み始めた外の世界が見える頃。僕は思考に疲れ果てて眠りに落ちた。

他愛も無い日常が始まり、僕の肩をすり抜けてゆく。

一時間程の睡眠しかしていない僕は、眠気の覚めやらない体に鞭をうつて、冷水で顔を洗って眼を覚ますと、まだ帰つてこない両親にメモを残し、いつもより遅い時間に家を出た。

遅めに出たのには理由がある。学校に遅刻しないギリギリの時間に出る電車に乗つて行くためだ。いつもと同じ時間に出れば、おそらく駅で富沢に遇つてしまふ。

とにかく今は、彼女を避けたい。

僕は、いつもより30分遅い電車に飛び乗ると、いつもと違う、見慣れない客層をボーッと見つめながら、脳裏の裏に鮮明に焼きついた富沢の姿を思い浮かべては消して、長い駅のプラットフォームに降りた。

「ふう…」

駅を降りた僕は、腕時計で時間を確認した。  
早歩き気味に走つていけば、バスに間に合う時間帯。僕は定期を見せて改札を出ると、早歩きでバス停に向かつた。

鞄を揺らして走る僕の目に飛び込んでくる田舎の町並み。

いつもと同じ道。いつもと同じ風景。時間は遅いけど変わらない。

同じだ。

なんだ、やはり何も変わらない。変わらないじゃないか。

驚くことじやない。変わるはずがないんだ。

昨日起こったことも、今日起きることも、全て何も変わらない日常だ。

変わったと思つてしまつた、僕の一時の氣のせいなんだから。

「え

だが、僕は変わっていた。

バス亭でバスを待ちながら俯く彼女の姿を見て。

「あ……」近藤君……。おはよう

富沢は走つてきた僕に気付くと、深くお辞儀をした。

僕は、富沢の姿を見て条件反射的に「おはよう」と言つたが、心中はすでにパニック状態だった。何故ここで富沢と、僕がせっかく時間を遅らせて来たというのに、これじやあ、まるで意味が無い。まさか、昨日の仕返しのために待ち伏せか。

「な、なあ、近藤君。昨日のことだけんど」

あらぬ事を考へている間に、富沢のほうが話しかけてきた。

怒るか？喚くか？泣くか？殴りかかつてくるか？どちらにしろ、僕には逃げ場がない。せめて他の誰かが一緒に乗るバスが来てくれれば助かると僕は思ったが、鳥の鳴く声だけが聞こえる辺りを見るに、その可能性は絶望的だった。

「近藤君、黙つて聞いてけろー！」

「なんだよー！」

ジリジリと僕に近づく富沢。

大声で僕を呼ぶ富沢に思わず怒りに似た声が出た。

ギュウウウ…

急激に富沢の拳の隙間が圧縮されていく摩擦音。

僕は、とっせに富沢の顔を見た。昨日泣きはらしたであろう富沢の真剣な眼差しを見るに、僕は悟った。ああ、おそらく一発ぶん殴られる、と。

「近藤君ー！」

「うわあっーーー！」

勢いも良くてビュンと伸びる彼女の腕。

およそ、ヤワな普通の女の子とは違う、恐るべきスピードを兼ねた拳の切っ先は、いわゆるアッパーに近い軌道で僕目掛けて飛んでくる。恐怖に怯えた僕は、思わず頭を躰つて下を向き、手に持っていた鞄で彼女の迫り来る拳を避けようとした。

ビュンッー！

当たる……と僕が思つた瞬間だった。

「近藤君ー今週の日曜日ーおひと、映画見に行こうー！」

拳の軌道にふわりと揺れる薄紙が一枚。

富沢が差し出したのは、近くの映画館で上映される映画の前売りチケットだった。

「……え？」

「お、おらー今まで近藤君に迷惑かけたから…せめてもの償いだあ

「…でもさ」

「お、おらと行くのが嫌ならー誰か違う人を誘つて行つてける！な、なんも心配はいらねえだ。おらは田舎もんだから、近藤君が誰と行こうと別に気にしねえだ。そ、それにおらの知り合いの映画館だから！誰も文句はいわねえし、おらも安心だ！」

「いやでもさ」

「頼む近藤君！行つてもらわないと、おらの気がすまねえ！な？なあ？」

「まさか富沢さん、そのためにここに待つてたの…？」

「えつ…な、何を言つて…はははー今来たばかりだよ

嘘だ。

学校の風紀に厳しい富沢に限つて、そんなことはありえない。

靴と鞄の汚れ、それに彼女が座つていたベンチの跡を良く見てみる。他の部分に比べて、そこだけ異常に綺麗になつてゐるじゃないか。長い間、座り続けたからそつとなつてるんだ。

僕は富沢に強く言つた。

「誰よりも遅刻につるさない富沢さんに限つて、それはないだろ。いつもなら、とっくに学校についてる頃だ。嘘をつくなよ」

「『』、『じめん！お、おら近藤君に謝りたかった。あんな風に…その…みつともねえとこを…』

「やめろよ！」

「おらが悪かった。悪かったよ。でも、おらは近藤君のことが…」

「やめろー。いくら装つても、僕にはわかるんだぞ…」

「そんなあ、ひびこよ。本当の事を言うのは、おだりて恥ずかしいだよ…」

「やつぱり嘘だったのか…」

「嘘じゃねえだ…信じてけろ…。だが近藤君の心を傷つけたかもしけねえが、おらは近藤君と仲良くなりたかつただけなんだ。他はどうでもいいだが、それだけは信じてけろ…なあ…なあ…」

僕は、頬を紅潮させながら眼を逸らす富沢を見て、昨日焼きついた罪悪感を思い出した。

昨日あれほど悪魔に汚染されたはずの良心が、じびついた矮小な気持ちを晴らし、僕の心の器は、富沢への謝罪の気持ちへ満ち満ちて、やがて溢れていく。

「ふん、わかったよー。行つてやるよー。今度の日曜日なー」

「本当に…？」

「でも、他に誘う誰かなんていないから、富沢さんと行くよー。」

「あ、ありがと」

「だから、いつも通り笑つてよー。めそめそしてる富沢さんなんて気持ち悪いよー。」

「ん。んだなあ。おり、馬鹿だけど元気だけが取り得だ。ありがとな近藤君」

「勘違いするなよー。僕は今までのこと、許したわけじゃないからな」

「ははは、お、おり。近藤君と一緒に居れれば、それでいいんだな」

…

なんだ。なんとも不思議な感覚だ。

どこか胸の奥が、すつきつとするような。どんよりとした曇り空が晴れたような。

何物にも変えがたい、気持ちの良い、そよ風が僕の心を駆け抜けてゆく。

「あ、バスが来ただ。急がないと遅刻するべ！近藤君！」

「あ、ま、待つてよ」

僕らはバスに飛び乗った。

宮沢は、僕の隣に座りながら、停留所に降りるまで終始笑顔だった。何故だか僕も、彼女の笑顔を見て安心感を覚えた。なんだかんだで僕も、罪悪感への埋め合わせが出来た事が嬉しかったのかもしれない。

その日、僕らは初めて学校に遅刻した。

日曜日の朝。

僕は待ち遠しかつたような、もつと先であつて欲しかつたような複雑な気持ちで目覚めて、乱れた寝巻き姿の体の腱と言つ腱をグンと伸ばしながら、うつすらと結露のついた窓の外を覗く。

土臭そうな田舎道の上には、まばらに白い雲が広がっていた。

およそ晴れてはいたが、念のため僕は、天気予報で今日の天気を確認した。

降水確率30%。

降るんだか、降らないんだか。まるで今日の僕の気持ちのように優柔不斷な数字に苛立ちを覚えた僕は、珍しく朝食の時間に出くわして両親に外出の言伝をして、そそくさと自室で準備をして家を出た。出かける時に驚いたのは、いつも忙しそうしている母が「あら友

達？行つてらっしゃい」と微笑みながら玄関まで送ってくれた事が印象的だった。

日が昇り、すっかり暖かくなつた土臭い田舎道を歩く僕の手の中には、一枚の映画チケットが握られていた。富沢から貰つた薄っぺらな前売りチケットには、今日見る映画のタイトルが書いてある。

### 『甘い約束を』

題名からいつて恋愛映画？いわゆる少女趣味の延長線か…？

僕は駅に進む足を一瞬止めて立ち止まつた。

富沢は知り合いから貰つたと言つていたが、実のところ、これは彼女の趣味なのではないだろうか？実際、富沢は小学校高学年の頃から、周りを囲む女子連中に吹き込まれてやたらとこういう物に触れていた。恋だの愛だのと一人で騒ぐのは結構な事だつたが、その事に関して僕にやたらと絡んできた。僕はその度に、心の中の羞恥ずかしさを隠しながら冷たくあしらつていた。それでもしつこく迫る富沢の鈍感さにも呆れたが、僕は負けなかつた。

物心ついた頃から、人を愛するという事が一番苦手だったからだ。

チリンチリン…！！

その時、田舎のあぜ道を通つた自転車の呼び鈴が僕の背中を貫くように鳴り響いた。

狭い道の真ん中で立ち止まつた僕が邪魔だつたのだろうか。だが、そのおかげで止まつっていた足は、意志とは無関係に動き始めた。帰らうとも思つていた僕の意思は、流されるまま駅に向かっていく。

何でもいい。これで富沢に謝れると思えば。

はつきり言つて、この時の僕は相当ヤケツパチだつた。

都会に居た頃、映画なんて興味が無かつた僕が、誰かと映画を見に行くなんて前代未聞だ。見ると言われて流行りの映画を何本か見たが、見ることに嫌悪感を抱いていた僕が感情移入し、感動に足りえる物など無く、どれも会話と教養のための惰性で見ていた。娯楽に疎い僕が、まさか、わざわざ映画館に行くなんて…。ああ、もう、どうにでもなれ。

差し迫る憂いの時間想像しながら、僕は電車に乗つた。

車内での時間は、あつという間に過ぎ、僕は隣町の駅を降りた。七つ並んだ改札口に乗客が人を押しのけて歩いてゆく。隣町の駅は、普段僕らが通う閑散とした駅と比べれば随分開発が進んでいた。ここは、田舎の中でも都会のほう。いわゆる、田舎の中でも数少ない娯楽の集う繁華街だつた。定期を使つた乗り継ぎの清算を済ませると、僕は人の波を潜つて、出来たばかりの映画館まで直行した。

気付けば、いつの間にか、僕の進む足は、速かつた。

曇り空が浮かぶ町並みを抜けて、映画館に着く頃。

僕は、手につけた銀色の腕時計をサッと見ると、時計の針は午前9時4分を指していた。

速すぎた。どう考へても速すぎた。富沢と決めた集合時間は、映画館の近くにある、ドアに鈴のついた古びた喫茶店の前の街路樹の下で10時。映画が始まるのは10時30分。時間を潰す術も知らない僕が、こんな時ばかり張り切つて速く来てしまつ。

張り切る？いや、張り切つたわけじゃない。

たとえ相手が宮沢だとしても、遅れてはいけないと思つただけだ。

思いつくだけの言い訳を考えながら、僕は次第に思考する事を諦めて、映画館に集まり始めた人ごみから逃げるよう、横断歩道を渡り、集合場所の目印である喫茶店の方へ向かつた。

「はあ…」

どんよりと沈み出した曇り空。

一雨来るのか…僕は、喫茶店の蝶細工の食品が並ぶ、ガラスで出来たサンプルショーケースの前で、思わずため息をついた。時間にうるさい宮沢のことだから、きっと遅れることは無いと思うが、それも集合時間の5分ないし10分前程度だろう。それまでの間、僕は街行く人の目に晒されなければならないのか。これじゃまるでサークスのピエロだよ。…まあ、サークスに行つた事はないけど。

「…近藤君！？」

その場に立ち尽くしていた僕の右側から、驚く声が聞こえる。  
なんだ？知り合いか？僕は声に気付かなかつた風に左を向き、チラリと喫茶店のサンプルショーケースを覗く。

「近藤君！」

コンクリートを蹴つてどんどん近づいてくる声。僕は無視を続けた。  
やめる、そのまま過ぎ去ってくれ、僕は近藤じやない。今だけ近藤に似た誰かだ。馴れ馴れしく、近寄るんじやない。

「おーい！近藤君…おらだよ！…宮沢だよ！」

「えつ」

富沢。といつ言葉に、ショーケースを覗いていた僕は反射的に右へ振り向いた。

遠くから一生懸命に手を降る、少し背の高い年頃の中学生。僕は、なんとなく懐かしさを感じた。私服姿の富沢を見るのなんて小学校以来、久々かもしれない。走りながら帽子を片手で押さえて、僕の立つ位置に速力最大で近づく富沢。編みこみの入った白い靴がコツンと音を立て、肩から提げられた小さな赤色のポシェットが跳ねる。

「近藤ぐーん！あつ

ドタッ！

手を降る富沢が道路の隙間につつかかって転んだ。

その拍子に、帽子を押さえていた手は外され、吹く風にふわりと浮かんだ麦わら帽子を目についた僕は、思わず走り出して地に付く前に赤いリボンのついた麦わら帽子を捕めた。

「い、痛たた…」

「はい、これ」

「い、ごめんねえ近藤君。帽子…拾ってくれてえ、ありがとう。てへへ、おり、ドジだなあ。近藤君の姿見て慌てちまつて

「大丈夫富沢さん？立てる？」

「へへっ、おら丈夫だから。このとおり！だ、大丈夫だあ

「膝、すりむいてるじゃないか！」

「こ、こんなもん。睡つけときや、そのうち直るつペー

「ダメだよ！もしバイキンが入つたらどうするんだ！」

「きょ、今日の近藤君。なんだか、優しいだなあ

あれ？何でだ。富沢にそういうわれて見れば、確かにおかしい。  
なんで僕は、こんな優しい台詞をすらすら言えるんだ。富沢を傷つけたという罪悪感の延長？…そんなんじゃない！そんなんじゃ！

僕は、目の前で微笑む富沢を背けるように、辺りを見回した。  
街行く人たちには、僕らに視線を向け始めていた。この聴衆たちの視線。僕は、なんとも気恥ずかしい気持ちに陥った。

「富沢さん、早く立つてよ。…皆が見てるじゃないか！」  
「え、あ。ああ。ごめんねえ近藤君」  
「もう！何やってるんだ！行くよ！」  
「え、い、近藤君！」

倒れた拍子に集まってきた田舎者の野次馬達の視線を感じ始めた僕は、渡した麦わら帽子をグイッと富沢に被らせると、富沢の手を掴んで引っ張り、そのまま喫茶店のほうに逃げるように駆け込んだ。

雨が、ポツポツと振り出した。

### カラソカラソカラソ

古びた喫茶店のドアについた鈴が、数度鳴る。

恥ずかしさの余り、思わず中に入ってしまった僕と富沢だったが、この喫茶店は外観からは想像できないほど硬派な店だった。流れるジャズ、立てかけられたイラストは黒く滲み、苦みばしった香りが店内中に広がる。いわゆる「コーヒー通が通うような、専門店だった。

「いらっしゃい。おや珍しい、随分と若いのが来たね」

茶色のパイプをふかしながら、本を読んでいた初老のマスターの声が僕らを驚かせる。

すすぼけた店内時計が示す時刻は9時14分。外の人たちの喧騒が消えるまで、とりあえず落ち着くために席につこう。なあに上映時間までは、まだたっぷりある。慌てる事は無い。僕は、無意識の中に富沢の手を握つて奥の席に向かつた。

「！」近藤君。そ、その。お、おら。おらの…」  
「？」

奥の席に向かう僕の背中側から、富沢が恥ずかしそうにどもり声をあげる。

なんだ？と思つた僕は、振り返つて富沢を見た。青のワンピースに白いカーディガン姿の富沢は、僕を見ながら赤面していた。よほど、さつきのが恥ずかしかったのか？それは僕も同じだ。だから入つた事もない喫茶店に飛び込んだんだ。

しかし、富沢が赤面していた理由は他にあった。

「お、おらの…！お、おらの手。その、近藤くん…手がつ…！」  
「えつ？…うわあ…！」

なんということだらう。

僕は無意識の内に、富沢の手をギュッと握つて離さなかつた。いつの間にか、接触していたことさえ忘れていたのだらう。僕は、動転する脳の指令に従つて、まるで払いのけるように富沢の手を離した。

「し、しかたないだろー慌ててたんだ！」

「べ、別におら、氣にしてねえだ！むしろ…ちょっと嬉しごぐらいだ」

「気持ち悪い奴！わつと席につけよ！」

僕らは喫茶店の一番奥の席についた。

席につくまでは良かつたが、それから双方とも気恥ずかしさが残ったのか、互いに顔を背けて5分程度の沈黙が続いた。僕は、チラチラと富沢を見ていた。服装からして、いつも富沢の雰囲気とは違う。見たことも無い青のワンピースと白いカーディガンは、まだ値札がついてそうな新しさが見えた。赤いポシェットも、靴もそうだ。どれも昨日買つたばかりの新品と見間違えるほど綺麗だった。いつも学校で会うセーラー服とはまるで違つ。

似合うとか似合わないとかそういうのではなく、僕は富沢に異質な感じを覚えた。

俯いた薄桃色の顔をうかがいながら、僕は富沢の、どこか大人になれない子どもの背伸びの仕方が愛らしく、可愛く思えた。

…可愛く？待て、可愛くってなんだ！おかしい！

僕は孤独が好きだろ！孤独と自分以外は愛せるはずがないじゃないか！

僕は、いつの間にか、彼女を意識していた。

まだ続く静寂。ポツポツ降っていた外の雨は、次第にザーザーと本降り手前の様子を見せていた。俯きながらもチラチラ周りを見回す富沢。僕も負けじと辺りを見回す。実に無駄な時間だが、二人の距離感は、静寂というそのバランスを崩さずにいた。

そんな二人の静寂を打ち崩したのは、茶色のトレイに水の入ったゴップを運んできたマスターの声だった。

「ここにいる学生さんかい？本来なら学生はお断りなんだが、傘も持っていないようだし、雨宿りなら仕方が無い。若いの、何にするかね。この店はちと高いが、本格的だぞー」

僕は置かれるコップの水を一口飲むと、マスターの声に従つてメニューを開いた。

だがそこに待っていたのは、世界史の地図帳のような名前の数々だった。

「な、なんだこれ…？」

「ん…？近藤君、そんなに難しい顔して…なんだべ。おいらにも見せてけバ」

僕は富沢にメニューを渡した。

わかるはずがない。勉強の出来る僕だってわからないんだ。成績で劣る富沢にわかりっこない。「コーヒーだけで何十種類も項目があるんだ。どう考へても、富沢にわかるはずがない。

「はっはっ、どうするかね。若いの」

マスターが、僕の不安を見抜いたように、間髪入れずに催促する。ありえない。このタイミングで、それを言つたら。頬まざるを得なくなる。くそつー。こうなつたら知つてゐる単語を言おう。メニューをじつと見つめる富沢には悪いが、僕は「コーヒーと並んでこれ」という単語を教わっていた。

「ふ、ブルーマウンテン。ホット。砂糖なしで」  
「あつ、若いのに知つてるね~」

「どうだマスター。決まつただろ？」

おぐびにも出さないが、僕だつて「コーヒーの種類、ぐらい言えるんだぞ。ふう。しかし、これで楽しみも増えた。目の前の宮沢が何を頼むか。どれほど滑稽な言葉を吐くか、嗜虐的な思考をフル回転させると、僕は何となく背筋がゾクゾクした。

「あの、ア…」

「ん？ どうしたね、お嬢さん」

まあ言えー恥ずかしさの余り、顔から火が出るようなメニューの名前を！

宮沢！ 言えーどんなに大人ぶついても、僕より劣るといへ、その証拠を言つんだ！

「」 いんのお店。カフェオレ、無いんですかあ？」

「ずわあああああああつーば、馬鹿なー宮沢の奴、なんて無難な選択なんだ！」

硬派な本格コーヒーを売りにするマスターの店で、ミルク入りのカフェオレなんて、裏技に近い選択肢じゃないか！く、くそー。そんな選択肢があるなら、僕もそれにしあけばよかつた…。

「ははは。背伸びする坊ちゃんはブルマンで、可愛いお嬢さんはカフェオレね。すぐには出来ないから、ちょっと待つてくれよ」

マスター、余計な事を言つな。僕だつてカフェオレがあるなら、カフェオレにしてたさーまったく宮沢にしてやられた。田舎者の素直さに、都会の見栄が負けた。圧倒的敗北感の中で、僕は香り高く、

値段も高く、苦さも高級な、ブルマンコーヒーが来るのを待つた。

そして、トレイに乗せられてきた一つの飲み物が僕らの前に置かれる。僕らは良い香りの中で、次第に凍っていたはずの静寂を溶かしていった。

「『めんねえ近藤君。おら、母ちゃんに、こうこう所を連れてきてもらう時は、いつもカフェオレなんだよ』  
「ふ。田舎者め」

「近藤君は大人だなあ。おら、コーヒーって一度しか飲んだ事ねえだが、そんな苦いの砂糖なしじゃ、飲めねえだ」

「ま、まあな。僕は都会でいつも飲んでたよ」

「やっぱ『めんねえ近藤君は。何にしても様になるだよ』

「うぐぐ…」

襲い掛かる苦味に悶絶しながら、会話する僕。

なんとか表情を悟られまいと、ちびちびとコーヒーを飲んでいた僕に対し、カフェオレを悠々とする宮沢は、実に疎ましい存在に思えた。宮沢はカフェオレのおかげか、赤面していた顔からは随分と赤みが消え、普段の彼女の顔に戻っていた。

「あ、映画まであと30分はあるだ。終わったらどうするか、今  
の内に決めようねえ」

「終わったらどうこうこと?」

「なに言つてるだよ。せっかく町まで来たんだ。普段はこんな都  
会…と言つても近藤君からすれば、ここも田舎か。まあ、羽を伸ば  
すのも、おら達の役目だつてことだ」

「…僕は嫌だよ」

「そ、そうだよなあ。おらも近藤君に映画見てもうつもりで來  
たんだったのすっかり忘れてただ。お、おらばかり浮かれてばかり

で、ほんと、「じめんなあ近藤君」

「高沢さん。その、いちいち謝る癖。気になるから止めてくれないか？あの時、君を傷つけたのは僕なんだし。何度も謝られると、意味合いが薄くなるよ」

「「」「じめんなあ…あつ…」

「…」

「そ、そうだ！近藤君！お、おらり映画のパンフレットも、もうひとつただよ！一緒に見るべ！」

「…他にやることもないし、仕方ないなあ」

僕らは喫茶店の中で、少しづつ打ち解けながら、時間が過ぎるのが待った。

近い。手を伸ばせば簡単に肩の触れる距離。赤の他人に、これほど顔を接近させることは今まで無かつた。だが、僕が本当に怖かったのは、孤独を愛しているはずの僕が、他人との接触を意識して、卒なく会話をこなしていくことだった。

その内に、雨が上がった。

僕らは会計を済ませると、来たときと同じ鈴を鳴らして喫茶店を出た。

日差しの見え始めた空の下、濡れたコンクリートの匂い鼻で感じて僕らは、大人びた口調と態度で、ちょっと背伸びをしながら映画館に入つていった。

中学生の僕らが、すがたがたち姿容を背伸びすることは、何も悪くない。悪かったとすれば、口の中に残る「コーヒーの味が苦かったことくらいだ。

駅からの通り沿いにある新しく出来た映画館は、誰の目から見ても繁盛していた。

今やつてゐるのは、流行りのSF映画、アクション映画、恋愛映画など、洋画邦画関わらず、様々に放映されていた。

意気揚々と喫茶店を出て、麦わら帽子を片手にした富沢に半ば強制的にぐいぐい引っ張られて映画館に入つた僕は、静かに沸き返る客席を見ながら右側中央席につくと、ドスッと音を立てて座り、ソワソワする富沢が隣に座ると、数度ため息をついた。

不安が的中したからだ。

朝、あぜ道を歩きながら僕が考えていた事が現実に起つてしまつたのだ。

そう、つまり、僕らが見る予定の外国映画。本題を『Promise You』、邦題『甘い約束を』は、全てではないが、喫茶店でパンフレットをぱらぱらと見た限り、やはり、紅茶のない砂糖菓子のように氣だるく甘つたるそうな、少女趣味の延長線に出来た映画のようであった。

「じよ、上映時間までえ、あつと十分だけど、近藤君何か買つとくもんあるけ？」

「いや。さつき「コーヒー飲んだばかりだし。いざとなれば抜け出して売店に行くよ」

「で、でも映画の途中で抜け出すなんて」

「あ、いいよいよ富沢さん。僕のことば気にしなくていいから、君は映画を見てくれよ」

「そ、そつかあ……」

場内のオレンジ色のライトの光に照らされて、隣の席に座った富沢は、口元は笑っていたが、目は、どこか寂しげに僕を見つめる。僕は富沢の結わいた黒髪に薄らと漂う整髪料の匂いを鼻で感じながら、強い言葉で言い返す。

「映画、始まっちゃうよ。好きなんでしょう?」

「え……ははっ。お、おらはチケットもりつただけで……そういうのはあんまり……」

「富沢さん」

ピシャリと、富沢の心を突き刺すような僕の視線と口調。

富沢は、バツが悪そうに笑いながら、田線を何処かへ泳がせる。

「は、ははは、な、なんだべ近藤君。そ、そんな田して、おらを見たらダメだよー」

富沢の、この態度、この様子。  
やはり、嘘か。

人の心を見透かしたりするのは、余り良くない事だと教わっていたが、富沢のつく嘘のモーションは、どこか未熟で、どこか見え見えとも思えるぐらい、わかりやすかった。

嘘のつけない性格。実際、そこが彼女の良いところなのかもしないが、なぜだか僕の心はこの時、恋愛映画を見るという苛立ちから、富沢の小さな嘘を許せなかつた。

大人の気持ちを持つてすれば、黙認することも出来たであろう小さな嘘。それが他の人ならば許せたのかもしれないが、僕は富沢が『僕に対して』嘘をついたという事実が許せなかつた。

あ、あれ？ ゆ、許せない？ 傷付けて謝罪すべき僕が、何故？  
おかしいな。なぜ富沢だけに、いつも固執するんだ？

視線と顔をそのままに、再び頭の中で始まる僕の葛藤。

幼少、早い段階で自分で植えつけた歪んだアイデンティティーと、  
より感情的な反応に動搖する素直な自分との静かなる戦いの時間を  
止めたのは、富沢の声だった。

「う、じめんなさい近藤君。本当は、お、おらが買つただ」

「やつぱりね」

「そり怒りなえでけり…。おひ、びひしても近藤君と映画を見た  
くて」

「別に怒つてないよ」

「いんや、近藤君は怒つてるだ。やつぱ、おひ… 一人で映画を見  
く…」

「誰も見ないなんて言つてないだろ富沢さん」

「そ、そうかあ。ははは、おら、また近藤君に嫌われたかと思つ  
ただ」

「いつ僕が富沢さんを嫌いなんて言つた？」

「あの時」

富沢の目線が下を向く。

その時、僕はハツとした。

そうだ。たしかに言つた。心を悪魔に変えた僕が、あの日確実に言  
つていた。

何をやつてるんだ。何をしたいんだ僕は。今日さ富沢へ謝ひつと  
思つて映画館にきたんだろ。

あんなに傷付けた富沢の心に、僕はまた鞭を打つとしていたのか。

「この外道め！」

「ごめん富沢！本当は君に謝りたいんだ！」

僕は何度も心の中で、大きくそう叫んだ。  
だが、言えない。脣が震える。「ごめんなさい」と言ひ、たった一言  
が重い。

そして、僕が実際放つ言葉は、謝りうとする人の態度では無かつた。

「き、記憶力は、割といいんだね。流石、風紀委員」

「そんな…。おらは別に、そういうつもりじゃ」

「まつ、まあいい。せつかく誘われたんだ。」「」は富沢さんの  
顔を立てて見てあげるよ」

「ありがとうなあ、近藤君。やつぱり近藤君は優しいだ

「でも嘘はダメだから。僕に嘘は」

「し！しねえよおーおー、これから近藤君には絶対嘘はつかねえ  
だ！」

「ふん、どうだか」

「」とした態度で富沢を見下す僕。

本当は、そんなことをしたいんじゃない。長い孤独の中で、僕が忘  
れ失ってきた返答の仕方。誰かの心を泣かせたら、心で謝るという  
単純な回路の復帰が何故出来ないんだ！

誰か、この捻くれ者の心の声を富沢に開かせてくれ！

素直な気持ちを表せずに、葛藤の坩堝に落ち込む僕。

だが富沢は、そんな僕の心を察するように、条件をつけてきた。

「じゃ、じゃあ、約束しよーもし、おらがこれから嘘をついたら、

今後一度と近藤君の前には出ねえだ！」

「えつ…」

富沢の意外な発言に、僕は驚きを隠せなかつた。

「何もそこまで」と思つたが、案外、孤独をアイデンティティーにしている僕にとつては「都合のいい約束なのではないだらうか?」とも思えてしまひ。

「どうだ近藤君?」

「…」

「悪い条件じゃなかろ? お、おら、近藤君の心を察して言つてるだ」

「うーん…」

僕は俯きながら悩んだ。

ここにきて、未熟だと思っていた富沢の心のモーションが読めない。嘘をつくような子じやないから、おそらく眞面目に言つているとは思うが、余りにも約束の幅が広すぎる。かといって、引き下がるようなおしとやかな少女でもない。

悩む内、オレンジ色のライトが暗くなり始め、上映の時間が迫る。

いつまでも悩む僕と、暗くなり始めたライトに焦つたのか、富沢はいつになく強氣で、挑発氣味に言つた。

「！」近藤君！ 君は優柔不斷だなあ！ いつもは大人の真似事してゐみたいに、孤独だなんだつて、カツコつけてるけんじ、おらみたいな女の子の前で約束一つ出来んのけ？

「なんだつて！ 君が約束を守れるかどうか心配だつたのさー。」

「おら、馬鹿だけど約束は守れる子だ！」

「わかつてるよー富沢さんが誰かと約束を破つたことなんて、今

まで一度も無いじゃないか」「

「じゃあ早く約束するだ！」

「むひひ…」

「わあ早くーーそろそろ映画が始まつちまうだよー。」

僕は焦った。富沢の元気な声は、映画館に響く。

上映時間が迫っているというのに、この調子では、上映中も吼えているかもしれない。実際にもう同じ映画を見る、場内のお客のどよめきが、僕の耳に聞こえ始めた。

そして僕は、周囲の注目を浴びる恥ずかしさと、田の前の富沢が起こす面倒事を解決するため、よくよく思考した自分の結論も出さないまま、富沢に強く言つた。

「わかつたよー！約束だらうがなんだらうが、してやるよー。だから静かにしろー！」

「よーしー指きりだ！」

「これで終わりだな？」

「んだ。けども、おらだけじゃ不公平だ。近藤君も、おらの言つ約束を守るだよー！」

「約束？ああいいわ、どうせ富沢さんの考える事だ。たいしたことないだろ。いじょ、それでーもう映画が始まるー静かにしないかー！」

「約束だかんなーー！」

互いに鼻息を荒げながら、僕らがドカッと音を立てて椅子に座ると同時に、映写機が回る音と供にスクリーンに巨大な映画会社のテロップが浮かび上がり、スピーカーから音が放たれる。美男美女が交差し、青春の内に躍動する恋愛映画が始まった。

僕は苛立ちによる興奮の余り、1時間45分もの長い上映時間、一回も席を立つことなく、ただ広がるスクリーンのラブロマンスの数々を淡々と凝視した。

終わった。実に長い上映時間だつた。

この映画、隣に座つた宮沢は、恥も外聞もなく、手製のハンカチをビショビショにするほど、その場でボロボロ泣いていた。それに比べて僕は、泣くどころか暗がりにペンを走らせ、メモ帳に英語を書いていた。

僕にとって、この映画は、つまらないとかつまるとか、そういう次元ではない。

いわば、1時間45分の長時間に及ぶ英語の授業だつた。メモ帳に走らせた字。アルファベットの羅列の意味は、映画の内容というより、日本語の字幕を英語に当てはめたものだつた。わからない単語があれば、スピーカーから流れる演者たちの発音を元に、クエッシュョンマーク付きで即興で書いた。英語と速記術には自信があつたが、流石に休憩もなく1時間45分も続けると、頭が痛くなつた。

最終的に映画の内容は良くわからなかつたが、最後に見た場面は、海へ消えてゆく男女を乗せた白いボートが大空に向かつて黒くフードアウトし、ハッピーエンドを迎えたのだろう。THE・ENDと書かれたテロップが終わると、主演女優らしき女性が歌う曲と供に、次第に下から上へスタッフクレジットが流れはじめ、観客達は席を立ち、誰もが話し声をあげながら、がやがやと非常口の明かりのついた扉を潜つて映画館の外へ出てゆく。

ハンドティングが終わると、あたりをオレンジ色のライトが再び照

うす。

隣で声を殺してボロボロ泣く富沢の姿を見て、僕は思わずメモ帳をしまつて富沢に声をかけた。

「富沢さん。終わったよ。映画」

「わ…わかつてゐだ。でも…でも…ひひひひ」

呆れた。

女の子といふのは、こんなに感受性の高い生き物なのか。

他の女性の観客たちもそつたが、涙を流す富沢のそれは、僕には到底理解できなかつた。

「良い映画だよお…ズズッ…なあ近藤君おら、感動しちまつた  
だよおおお」  
「…?」

なんなんだ。女の子が鼻をすする音を出すほど、そんなに感動する内容だつたか?

たかが、見知らぬ男と女が恋に落ち、様々な悶着の末、本当の愛に目覚める。

イコールを境にして両端が同じになるように仕組まれた方程式のようなもの。出来上がったチャートを軸にすれば、大よそ誰でも…そうだ、定石を踏み外さなければ、中学生の僕にでも書けそうなシナリオじゃないか。これの何処に感動があるのだろうか。不思議でならない。

「うえええ～ん！こおんじょおぐうううん…」

「つたく…ほら、ハンカチ」

だが、田の前の、ただ泣き濡れる中学生に上がつたばかりの少女

は、席を立つ事も出来ないほど、この恋愛映画に感動を得ていた。  
僕には到底、信じられない光景だった。

余りにも人の目につく彼女の嗚咽を聞いて、僕はそっとポケット  
から白色のハンカチを差し出し、あふれ出る涙と声を拭わせた。

優しく差し出す僕の手の動きは自然だった。

まるでシナリオ通りに動く、映画の中の男女のよう自然に手が出  
た。

「えぐつ…えぐつ…ありがとよお」

「人が見てるのにみつともない。おい、そんなに泣くなよ

「だつて、だつてえ…」

「泣いた富沢さんより、笑ってるほうが僕はいいな

僕がそつと言つと、富沢の涙に濡れた頬は一瞬にして薄桃色に変わ  
つてゆく。

わかりやすい心のドギマギが、態度や行動に出る富沢を見て、僕は  
ハツとした。

無意識に、素直な言葉が出ていた…？

「な、何言つてるべ！からかうもんじゃねえだよーで、でも。そ、  
それってどういう意味だ？」

「別に。特に意味はないよ。ただ笑顔のほうが似合つてるつて思  
つただけ」

「…じゃ、じゃあ、おら笑うだ！へへつ…へへへへへつ

「気持ち悪い。涙まみれの笑顔なんて見てらんないよ」

劇場のオレンジライトの明るい輝きが、僕の前で霞む。

涙目ながらも、僕の言葉に煌いでいる彼女の瞳が、僕の心の影を照

らじだす。

恥ずかしくない。

考えた言葉が、すりすり出る。意識せず、僕の口から。

「それにしても結構泣き虫なんだな、富沢さんって」

「おらだつて女の子だ。涙流すべりセンチメンタルになると  
きもあるだよ」

「へえ、意外。富沢さんでも、センチメンタルなんて言葉知つて  
たんだ」

「ひ、ひどい言い草だなあ。近藤君」

「そうかな？本当のことを言つただけなんだけど」

「むううう…」

「富沢さん。安心していいよ

「えつ？」

「僕は約束しなくても、富沢さんに嘘はつかないから」

「あ、え、ええ？」

「いつも馬鹿正直で、自分勝手で、おっちょこちよいで、お節介  
で、目障りで、僕の邪魔者で…ああ、それとお決まりの恋愛映画を  
見るくらいで泣いちゃうような泣き虫の富沢さんは…」

「も、もう、やめてける。おら田舎なくしそうだよ

言葉はどうあれ、僕は一つの間にか、富沢に対して素直な気持ち  
で喋っていた。

僕との会話に苦笑いをする間に涙が晴れた富沢は、僕のハンカチを  
丁寧に四つ折にして返して、ため息混じりに俯いて、ボソッと呟いた。

「はああ。おらは何で、この人の事、好いてしまったんだろなあ

…

好いてしまった。僕の耳には、その言葉がはつきりと聞こえていた。

だが、僕はあえて聞こえないふりをした。

「え？ 何？」

「な、なんでもねえだよーおらの、ひ、独り言だー。」

「ふ、ふうん」

少なからず僕も動搖はしていた。

だが、その時は、変に意識しないことで格好つけようと思ったのかもしれない。

「じゃ、じゃあ、とりあえず出るべか近藤君

「え、あ。う、うん。そ、そうだね宮沢さん」

「それじゃあ行くべ！」

「え、ちょっと、それ僕の鞄！」

赤面に近い色を帯び始めた宮沢は、気が動転したのか、僕の鞄と、自分の赤いポシェットをヒヨイと腕へかけると非常灯のついた劇場のドアに向けて走り出した。ドアを開けて入ってくる風を、深く被つた麦わら帽子の背中から感じていた僕は、その風に引き寄せられるように、映画館の外へと出た。

時が経つた。

「近藤君。わりいなあ、こんな時間まで」

「まつたくだよ。店を出るたびに、僕の鞄を持つていくんだから」

僕と富沢は、すっかり人の居なくなつた夜の駅の近くを歩いていた。

映画館を出た僕は、すぐさま駅に足を進めようと思つたが、富沢は僕の鞄を持ちながら、寂しげな顔で僕に訴えかけた。「行つてはダメ」といわんばかりの富沢の顔に、今の僕は「NO」と言えるほど強い拒否感がなかつた。おかげで、散々嫌だつたはずの『街遊び』のプランに、僕は、すっかり乗せられてしまつていた。

それほど拘りもないのに、遅い昼食にと一人でオムライスを頼んだ洋食屋。

たいして上手くもないのに、人形目当てでJFのキャッチャーをしたゲームセンター。

ろくに買物もしないのに、キャッキャッと各フロアを好奇心で練り歩いたショッピングモール。

神様なんて居ないと思っているのに、やる事がなくなつてお参りした神社。

隣に富沢の笑顔があるだけなのに、どれも春先に吹きぬける風のように鮮烈で、早い。

およそ時計の針が進むのを早めたと思うほど、時間が経つのが早い。信じられないほど。

いつもは毛嫌いする富沢：いや、他人という存在と過ごす時間が、これほど短く、楽しく感じたのは、僕自身、意外なことだった。

たしかに、その中には、傷付けてしまつた罪悪感にかられた謝罪の気持ちもあつただろう。

だが、純粹な富沢と会話を重ねるうちに、僕は重く閉ざされた心の扉が次第に開きつつあるのを確かに感じていた。ここ数年間、両親以外、誰にも開かなかつた僕の心の扉の錠は、富沢の持つている

鍵にぴったりだつたようだ。

「近藤君。もう駅だよ」

「あ、ああ」

ふと僕は、腕時計と電車の出る時刻表を確認した。まだ列車の出発までは20分以上時間がある。別れ難いとも思えてきた僕だったが、その瞬間は必ず訪れるることを知っていた。手を振つて、別れの挨拶をすれば、それで全てが成立する。今日という謝罪の日の終わりだ。

「なあ近藤君、まだ時間もあるし。ちよっとそこまで行くべ…」

「あ、ああ」

富沢の言葉に、僕の心が少し浮き上がった。僕は富沢に連れられて、近くの公園のベンチに座った。

「ど、どうだつた?」

「え?」

ベンチについた途端、急に富沢が質問する。どうだつた? 今日といつ口が、か?と思つた僕は、とうあえずいつもの調子で返答をする。

「休日にしては疲れたよ」

「そうか…」

「まんまと富沢さんに、そそのかされたよ」

「お、おら、なんだかんだ言つて自分勝手に近藤君のこと連れまわしちまつたもんなあ」

「まったく。もうやめてくれよな。」

「のうこうの

「ははは……」「めんなあ……」

乾いた笑いを浮かべる富沢は、何となくバツが悪そうだ。  
僕はそれを察することはできたが、まだ心の底に残る小さな悪魔と  
いう取つ掛かりが邪魔して、彼女に優しい言葉を言えないでいた。

「なあ、近藤君」

「え？」

しばしの沈黙を置き、富沢が僕の名前を呼ぶ。

「あの映画。そんなに面白くなかったけ？」

「ああ。富沢さんには悪いけど、面白くなかった」

「でも、近藤君、最後まで真面目に見てただ」

「字幕を目で、英語を耳で聞き取つてたのさ」

「ははは、そ、そうだったのけ。おら、てつきり気に入ってるも

んだと思つて……」

「映画に興味はないよ。だって、誰かが作った台本通りに人が喋るだけじゃないか」

「つ、冷てえだなあ。近藤君は」

「だから孤独なのさ。富沢さんも知つてるだろ?」

自嘲気味に、今までの生き様に酔う僕。

それを見て富沢は、何か言いたそうだった。だが一向に言つ気配はない。

何か重大なことでも隠しているのか?僕は富沢に質問してみた。

「富沢さん。言いたい事があるなら、遠慮せず言いなよ」

「えつ……?」

「わかりやすいからね、富沢さんは

「ああ……うん……」

「早く言ひなよ。黙つていられるより、いい気持ちだからね」

「……絶対、怒らないでけり?」

「怒らない」

「……絶対、おらのこと嫌いにならないでけり?」

「わかつたから、早くいいなよ」

「じゃあ、言つだ!」

富沢さんはベンチからバンと手をついて立って、僕のほうに向かって大声で言い放つた。

「近藤君! おら、今日確信しただ! あんたは都会の子だが、田舎の子にも負けねえくらい、とっても優しくて良い子だ!」

「えつ?」

「始めて越して來た頃から、おらは知つてゐ! 近藤君の本当の優しさ! 傷ついて、歪んでるけども、心は誰よりも纖細で、綺麗だつてこと! 誰かを傷付けるのが怖くて、誰かを悲しませるのが怖くて、結局誰とも接せられねえんだ!」

「な、何を言い出すんだ。富沢さん」

「近藤君! 嫌がらずに、誰か友達を作つてける! おら、近藤君が、す、好きだから。誰かに陰口言われて、指差されながら生きてゆく近藤君を見るのが嫌だ! それを孤独だなんだつて、認めてしまつ近藤君が嫌だ!」

「別にいいじゃないか。僕の勝手だ」

「そうやつて誰かのために一人になつて、自分の優しい気持ちを傷付けて、素直な気持ちだせねえのは悲しいよ。孤独なんて、ただ

寂しいだけで、何も生みやしねえだ！」

「君は僕の孤独を否定するのか！」

なぜこんなに富沢が、熱くなるのかわからなかつた。  
怒りにも悲しみにも似た、富沢の声に対し、僕は僕なりの理論を  
冷静にぶつける。

「近藤君の気持ち、おらわかるんだ」

「嘘をつくな！人気者の君に、僕の気持ちなんて、わかりっこない  
じゃ！」

「嘘じゃねえ！近藤君は優しくて！人が好きだ！」

「嘘だ！」

「おら最初から気付いてた！小学校に来たあの頃から…おらと近  
藤君は似てるんだ！」

「富沢さんと僕が似てる！？どこが…？全然似てないじゃないか  
！」

「おらも昔はイジメられてたからわかる！近藤君もそうだべ！？」

「そ、そんなこと…富沢さんと僕のはレベルが違う！」

口向のような富沢に、口陰の僕の孤独のアイデンティティーなど  
理解できない。

誰かに言われて孤独になつたわけじゃない。いつの間にか、孤独を  
愛してたんだ。嘘つき、インディアン、上辺人間、良い子を演じる、  
そんないらない物を消去していく残つたのが、僕一人。孤独その  
ものだったということだ。何が悪い。何が…！

「喫茶店でも、映画館でも、嫌いだつて言つたおらに優しかった  
じゃねえか！」

「それは富沢さんを傷付けてしまつたと思ったからやつたんだ！  
別に優しさじゃない！」

白熱の議論展開は、互いを興奮させた。

顔色は赤みを増し、呼吸は乱れ、額には汗が浮かんだ。だが、二人ともそこを逃げようとはしなかった。主張する、その思いを譲れなかつたのだ。

さつきまでの静かで楽しい雰囲気から一変した、どこか喧嘩腰の二人。

孤独を愛する者と、孤独を嫌がる者。そんな平行線をたどる口論は、すでに10分もの長丁場に及んでいた。

そして、ついに富沢は疲れたのか、麦わら帽子が置かれたベンチに座った。

呼吸を整えるように数度スーザーと深呼吸を繰り返し、僕の横で何か考えるそぶりをしながら、最後に大きな深呼吸をして、こいつ言い放つた。

「ふふあああああああーやつたーおら、やつとー近藤君に、言いたいこと言えたーー！」

「うええあー！？」

富沢の雄たけびに近い声は、僕を仰天させた。  
そして富沢は、いつも通りの笑顔を僕に投げかけた。

「ははは、本当は小学校の頃に言いたかつたんだけどね。おらも、そこまで近藤君のこと知らなかつたし、傷付けるのが怖かつた。でも、これで嘘はねえ。スッキリしただ

「富沢さん…？」

「『』めんなあ近藤君。映画館で約束したろ？おら、嘘はつけねえ。だから、こんときによつてこいつと思つてえ。腹の中で考へている事、全部言つておくだ

「じゃあ、今までのことは全部…」

「ははは、本當だ。おら、近藤君が来る前は、皆に嫌われてて独りぼっちだつただ。友達も愛想でしか付き合えない人ばかりだつた。近藤君もそんなんだろ?」

「うん…都會の學校でね…」

「近藤君を見て思つたんだ。おらと同じだつて。でもおら、最後まで孤独が良いもんだと、思えなかつた。誰かと話したり、誰かといがみあつたりして、結局他人と接しなきや生きれない、心の弱い人間なんだよ」

「そ、そんな。富沢さんは強いよ。孤独しか愛せない僕よりは、ずっと!」

「いいんだ。だからこそ、おらは『孤独だけど、本當は優しい近藤君』を好きになつたんだ。つーより、こりや格好をつけられるつてことの憧れかなあ?ははは、なんか全部言つたら笑いがこみ上げてきただよ」

「富沢さんって…結構大胆に物を言つね」

「え?あはは、大胆だなんてそんなことねーべよ。でも、言いたい事を言えるつて、大事なことだと思つんだあ」

僕は、笑顔を浮かべる富沢を前に自分が恥ずかしくなつた。小さな悪魔にそそのかされて傷付けてしまつたはずの彼女が、こんなにも自分を理解し、守つてくれたこと。自分の過去をサラッ言える大胆さと、嘘をつけない素直な彼女。その気持ちに気付いた瞬間、重く閉ざされていた僕の心の扉が、完全に開いた。

「富沢さん、じゃあ僕も。本当に言いたい事言つみ  
「ん?」

僕は決心した。

僕も富沢に対して、嘘はやめようと。

「今日は町沢さんと話して、本当に楽しかったよ」

「い、近藤君」

「僕は、君みたいな友達がずっと欲しかったのかもしれない。誰からも好かれて、誰からも愛されて。僕も君みたいになりたかった。でもなれなかつた」

「い、今から頑張れば、近藤君だつて、なれるべよ」

「いいや、僕には無理さ。君には素質がある。人から愛される素質がね。それが証拠に、君が安達先輩に告白された時、僕は嫉妬の感情が沸いたんだ。孤独を愛していたはずの僕がね。それほど君は魅力的なんだ」

「そ、そんたら近藤君に褒めてもらつて、な、なんかおら、ムズ痒いよつ」

「だから僕は、言わなくちゃならない。君に一言を」

「なんだべ？」

「今まで僕を守ってくれてありがとう。そして、あの時は、ごめんなさい」

たつた一言。

詰まつていって、一度と通らないと思つていた、言えなかつた感謝と謝罪の言葉が言えた。清々しさに目覚めた心の息吹、その躍動が、爽やかな風となつて僕の体を走る。

「い、いいだよーお、おら。馬鹿だからすぐ忘れちまうだ。べ、別に気にしてねえからー。」

手を麦わら帽子のツバにつけ、グイッと深く下下げて赤面を隠す宮沢。

小さな街灯に照らされながら、もじもじと鼻と唇を震わせて恥ずか

しがる宮沢を見て、僕はふいに映画館での一コマを思い出した。

「そういうえば、君が映画館で言つてた約束つて何？」

富沢は、僕の言葉をきくなり、再びもじもじと体を震わせ始めた。嘘をつけなくなつた僕らの関係でも、そんなに恥ずかしい事なのだろうか？僕は意地悪く聞いてみた。

「ねえ。気になるから。言つてよ宮沢さん。嘘はないんだから。恥ずかしがらずにさ」

だが、それでも富沢は答えなかつた。  
答えられないようなことなのか？とりあえず時間が気になつたので時計を見る。

やばい、そろそろ電車が来る時間だ。僕は、恥ずかしがる富沢を連れて、駅まで猛然とダッシュした。

ホームに電車が来る。

改札を通つて、僕らは電車に飛び乗つた。

相変わらず富沢は、僕の質問に答える気がないようだが、とりあえずはいいだろ？これからいつだつて話は聞ける。僕ら一人は、赤の他人から、共有する一人に生まれ変わったのだから。

いつの間にか僕は、孤独の時間が消えるのが怖くなくなつていた。自分を良く理解している人物が、こんなに近くに居ると思うと、な

せかそれまで無かつた勇気が沸き、実に頼もしく思えた。

ガタンゴトン…

そろそろ富沢の降りる駅が見えてくる。

僕の駅は二駅先。ここで富沢にお別れになるだひつ。また会えるその時が、僕にとって待ち遠しくも感じられた。

プシュー…

列車のドアが開く。

停車時間は2分弱。都会の駅から乗ってきた多くの客が降り始め、人もまばらになつた車両で僕は富沢に声をかけた。

「富沢さん。駅だよ。降りなきや  
「…」  
「どうしたの？駅だよ  
「…約束」  
「えつ？」  
「降りてけろー」  
「う、うわあー」

まるで引きずられるように、袖の中央を思いつきり引っ張られ、ドアから飛び出した富沢と僕。  
電車の先頭でホームを覗く車掌から、その光景は見えていたが、車掌は無碍にも停笛を吹き、電車を発進させた。

ゴトーンゴトーン…

暗がりの田舎道に続く線路に消えてゆく電車の影を田で追いながら

ら、僕は次の電車の時刻を調べていた。その内に駅のホームは客が消え、小さなライトだけがホームを照らし、実に閑散としていた。僕は次の列車が来るのが30分後だとわかると、ポツンとホームに立つ富沢を見た。

赤いポシェットに麦わら帽子を被った女の子がたたずむ。今思えば、夏でもないのに何故麦わら帽子なのか？だが、思うよりも先に、日向のような笑顔を持つ彼女には、その姿が実に似合っていた。

「なあ富沢さん。もういいだろ？人も居ないし、聞かせてよ。僕が守らなきゃいけない約束」

僕は富沢に問いかけると、富沢はコクッと頷く。僕はなんとなく富沢の顔が見たくて、思わず深く被った麦わら帽子に手をポンと置くと、ツバに手をかけ、今まで見えなかつた彼女の顔を、ゆっくりと薄暗いホームのライトに照らし出した。

「お、おらとの約束。ほ、本当に守ってくれるだな？」

まだ震えている富沢の顔には、麦わらの跡が見える。  
僕は、とりあえず「クリと頷く。

そして富沢は震える声に力を振り絞り、言った。

「近藤君。お、おら……」「……恋……と友達になつてほしいだ！」

富沢は、また嘘をついた。

さつき自分の心に嘘はつかないと誓つたのに。優しさが前に出てし

また。

彼女も傷つくのが怖いんだ。

「え？ …？」  
「富沢さん。僕との約束を破るの？ 嘘はやめなよ」

心なしか、声にも落ち着きと張りが出ていた。

宮沢には悪いけど、僕はもう決心している。そして、僕が宮沢にもう一つのことを言おう。

言おう、僕の素直な気持ちを。

「高沢さん。君がどう思おうと関係ない。僕は今日、気が付いたんだ。どうやら君が、僕の一番の理解者であり、親友なんだ」「ははは……親友……近藤君なら……や、やっぱ、そうだよねえ」「だけど、違うんだ。僕の心は。もう違つんだ。もう、自分自身に嘘をつくなはやめたんだ。」

「え？」

言おう、僕の素直な気持ちを。

「僕、宮沢さんが好きなんだ。僕みたいな恋人でも、いいかな？」

コクンと頷く宮沢は、僕の言葉にはつきりと「はい」と答えた。

僕らは、その日、互いに一つの約束をした。

友人であり、親友であり、理解者であり、恋人の宮沢と見に行つた  
映画のタイトルを思い出しながら、僕は、いつまでもホームから手  
を降る麦わら帽子の宮沢に送られ、帰りの電車に乗つた。

『甘い約束を』

交わる事の無いはずの平行線は、徐々に放物線を描き始めた。

【終】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0751e/>

---

甘い約束を

2010年10月31日21時42分発行